

10. 健康長寿センターにおける看護学部の活動

1) 看護学部の活動方針

健康長寿センターは、高知県立大学の関連学部が連携して、地域の人々の健康長寿の推進および健康長寿社会の構築に貢献する専門職者の知識や技術の向上に努めることを目的として設置されている。看護学部では、運営委員会を中心に健康長寿センターの運営及び活動に参画し、他学部や地域教育研究センターの教員と連携して地域健康啓発研究活動を展開している。また、看護学部教員や領域、学部全体等の単位で健康長寿センター事業を実施することで、高知県内の看護その他保健医療福祉分野に係る人材育成と県民の健康づくりに貢献することを目指している。センターの活動ポリシーである5領域【高知県民の皆様に対し健康長寿を啓発する活動】【高知県民の医療・健康・福祉政策課題を解決する活動】【高知医療センターとの包括的連携を推進する活動】【高知県内の医療・健康・福祉専門職者のスキルアップに資する活動】【高知県の健康長寿を研究する活動】を中心として、事業を展開してきた。

令和2年度より、感染対策のために出前型からYouTube配信の形式へ変更した健康長寿体験型セミナーは、今年度は、「認知症を理解する」をテーマとして他学部とも連携し、更なるコンテンツの充実に努めた。また、公開講座についても、遠隔会議システムを活用し、例年のコンテンツに加え、地域減災拠点事業との連携した研修会が実現できた。

次年度は、健康長寿センターと看護学部の事業の連携を更に強化する人員体制も整った。高知県民の健康長寿を実現していくための課題解決に向けた活動を推進していきたい。

なお、本報は、健康長寿センターにおける看護学部の主な活動の要約の報告であるため、各活動の詳細な内容は、「令和3年度健康長寿センター報告書」をご参照頂きたい。

2) 高知県民の皆様に対し健康長寿を啓発する活動（域学共生）

(1) おうちで健康長寿体験型セミナー presented by 健康長寿センター

令和2年度以降、新型コロナウイルス感染症の拡大による集合型での「健康長寿体験型セミナー」の開催が困難となったことから、「おうちで高知県立大学健康長寿センター体験型セミナー presented by 高知県立大学健康長寿センター」と題し、ユーチューブによる配信型の体験型セミナーを実施している。令和3年度は、「高知家、認知症との付き合い方」をテーマとして、看護学部、社会福祉学部、健康栄養学部、文化学部の4学部がそれぞれ動画配信を行った。看護学部は、小原弘子講師（老人看護学）が「認知症を理解しよう 私って認知症??」と題し、認知症状に早期に気づき医療機関や地域包括支援センターに早期に相談することの重要性に気づくことができる一般市民向けの教育動画を配信した。この動画作成は、看護学部専門教育科目「看護地域フィールドワーク」の一部として行われ、看護学部2回生4名も参加した。

学生は、認知症に関連する書籍を熟読し、認知症についての知識を身につけるだけでなく、高齢の一般市民にどの情報を伝えることが効果的かについても検討した。さらに、ユーチューブのアクセス数を増やす取り組みとして、一般市民向けのリーフレットを作成し一般市民が集う場に設置することも行った。

(2) とさっ子健診プロジェクト

メンバー：佐東美緒、田之頭恵里、徳岡麻由

土佐市では、小中学生に対する健康調査の実施とその後の指導を通して、小中学生とその家族が成長後も健康的な生活を送れるよう、健康の改善を促すことを目的に、平成24年度からとさっ子健診を実施している。本プロジェクトは連携事業の一つとして行われており、大学の担う役割として、学会・論文発表を通じた社会への情報発信や、児童および保護者に対する効果

的な支援方法を検討するため受診者の健康観・健康行動に関するアンケート調査の実施、アンケート及び検査結果データの解析、受診者にとってピアである学生の力を活用したお楽しみコーナーや食事バランスチェックの実施、とさっ子健診への助言等を行ってきた。本年度は、新型コロナウイルスワクチン接種に関する業務が行われたため、とさっ子健診は開催されなかった。そこで、これまでの9年間蓄積されたとさっ子健診の身体データ・問診結果と、受診者の健康観・健康行動に関するアンケート調査をすべて整理し、システム化することとした。

①とさっ子健診データ変換プログラムの構築

とさっ子健診のデータは、過去9年分の身体・検査データが蓄積されていた。現在、1,229名のデータが蓄積されている。年度毎にデータの分析が行われていたが、一元管理ができるシステムは構築されていなかった。そこで、「とさっ子健診データ変換プログラム」を構築し、貴重なデータが年度毎や、検査項目毎に検索・比較できるようにした。令和4年1月11日に最終版が納品されたため、今後、プロジェクト内で分析方法を検討し（令和4年2月3日学内会議）、今後の健診や、健診後の個別説明会などに役立てられるよう、分析を継続する。

②受診者の健康観・健康行動に関するアンケート調査管理システムについて

とさっ子健診では、受診した子どもに健康観・健康行動に関するアンケート調査を、受診直後、3か月後に行っている。現在、1522回分のデータが蓄積されている。今までは、紙ベースのアンケート調査用紙をそのまま保存し、年度毎に土佐市に報告していたが、アンケート用紙はPDFとして保管し、データはとさっ子健診データ同様、年度毎や調査項目毎に集計できるように、「とさっ子アンケート管理システム」を作成し、データが蓄積できるよう、システムの構築を行った。このシステムも、令和4年1月11日に最終版が納品されたため、今後、プロジェクト内で分析方法を検討し、今後の健診や、健診後の個別説明会などに役立てられるよう、分析を継続する予定である。

また、「子どもの保健行動を促進するための支援の検討ーとさっ子健診の結果を踏まえてー」というテーマでの共同研究を継続し、現在、分析中である。今後は、子どもの保健行動を促進するための支援を検討する。感染拡大により、教職員及び学生のとさっ子健診への参加はできなかったが、土佐市と大学が連携し協働することにより、子どもの健診結果の蓄積、健康意識調査の分析、とさっ子健診後の個別説明会の充実に向けての検討という成果が得られた。

(3) 地域ケア会議推進プロジェクト

本プロジェクトは、高齢者の介護予防を促進するために土佐市が平成25年度後期より行っている「地域ケア会議」の効果的効率的な方法の確立を目的に、会議運営に関する助言、作成した会議に使用するアセスメント様式をもとに会議内容の課題分析の支援を行うものである。今年度も引き続き、看護学部教員が看護師アドバイザーとして地域ケア会議に参加した。今年度は、Covid-19による感染拡大の影響もあったが、小原と中井が計8回地域ケア会議に参加した。循環器疾患や脳血管疾患を既往に持つ高齢者や、認知症高齢者の事例が多く、これらは、身体状態と生活動作とを統合したアセスメント、および、予後予測が必要な事例のため、看護職アドバイザーの役割は大きい。次年度も継続して参加する予定である。

今までは、医療職アドバイザーとして薬剤師と看護師とが別の週であったが、次年度より、2回/月の開催で、薬剤師と看護師が同席して地域ケア会議を開催する予定である。看護職アドバイザーとしての役割を明確にしていく必要がある。

3) 高知県の医療・健康・福祉政策課題を解決する活動

(1)中山間地域等訪問看護師育成講座

①事業概要

本講座は、平成27年度から高知県中山間地域等の訪問看護師の確保・育成・定着及び小規模訪問看護ステーションの機能強化を目的に、大学の教育力・学習環境を活かした「中山間地域におけ

る新任・新卒訪問看護師育成プログラム」を開発し運用している。中山間地域等の訪問看護ステーション（以下訪問看護 ST）と協働し、高知県、高知県看護協会、高知県訪問看護連絡協議会、高知県医師会、高知県社会福祉協議会、高知医療センターと共に新任・新卒訪問看護師育成に取り組み、新卒者 14 名を含む合計 137 名が修了し、在宅や医療機関等で活躍をしている。

②事業成果

i. 訪問看護スタートアップ研修（35 科目 138 時間）

【開催日時】前期：令和 3 年 5 月 6 日（木）～令和 3 年 9 月 21 日（火）

後期：令和 3 年 10 月 6 日（水）～令和 3 年 12 月 23 日（木）

【参加者】17 名：中山間枠 4 名（スタンダード枠 2 名、セカンド枠 1 名、サード枠 1 名）
全域枠 13 名（うち通年 1 名）

ii. 学習支援者研修会・検討会

新任者が所属する訪問看護 ST の学習支援者となる管理者等を対象に、学習支援に関する研修会・検討会を 3 回開催し、新任者の学習支援に必要な研修と課題や対処を検討した。

iii. 新卒 2 年目および修了者フォローアップ研修

新卒 2 年目を対象に、フィジカルアセスメントフォローアップ研修を 3 回開催した。また、新卒 2 年および修了者対象には 1 ヶ月に 1 回、家族支援、事故予知トレーニング、倫理研修、訪問看護の 24 時間体制と緊急時訪問、訪問看護に活かす POCU、がん疼痛管理、ACP と看取り・エンゼルケア、入退院支援などをテーマにフォローアップ研修を開催した。ケースプレゼンテーションは 8 回実施し、コンサルテーションは 10 件の相談があった。

iv. 保健所地域別の訪問看護推進ブロック会議

安芸、中央東、幡多福祉保健所管内の 3 ヶ所で開催し、各保健所管内の在宅医療・訪問看護の現状と課題を共有し、訪問看護師育成に関する課題や期待について意見交換を行った。

v. 参画団体による企画会議

関係協力団体による企画会議を 2 回開催し、新任訪問看護師育成の課題や対策、新卒 2 年目や修了者のフォローアップ研修、事業計画について協議し、高知県の訪問看護推進や人材育成における関係機関の役割について検討された。

③活動評価

今年度は、新型コロナウイルス感染拡大が継続するなか、対面とオンラインとオンデマンドを受講者が柔軟に選択できるハイフレックス型研修を取り入れ、通信機器の貸し出し、Web を利用した記録物の提出など ICT を活用した学習支援を行った。令和 3 年度の本研修（35 科目 157 項目）の学習目標の到達度を「とても思う」から「まったく思わない」までの 5 段階で評価した自己評価点の平均は 3.99 ± 0.71 (SD)であった。また、中山間枠スタンダード枠・セカンド枠 3 名の修了時の目指す姿および学習課題の自己評価は、ほぼ全員が「できた・まあまあできた」と捉えており、プログラムを活用して自信をもった単独訪問も可能となり、訪問看護 ST の一員としての役割を担い訪問看護に携わることができていた。なお、本講座の事業内容、実施体制、プログラムの詳細、事業評価については、本学健康長寿センター報告書に掲載している。

(2) 高知県介護職員喀痰吸引等事業

①活動の概要

本事業は、平成 24 年 4 月 1 日から施行された介護職員等によるたんの吸引又は経管栄養（以下「たんの吸引等」という）の実施のための研修の制度化を受けて、居宅及び障害者支援施設等において必要なケアをより安全に提供するため、特定の者に対して適切にたんの吸引等を行うことができる介護職員等を養成することを目的としている。基本研修と現地で実際のたんの吸引等を指導する実地研修から構成される。

地域完結型医療の推進に加え、新型コロナウイルス感染症の蔓延により、入院・入所中の面会が制限されるため、医療処置や介護が必要なながらも在宅療養を選択する方が増え、居宅や施設で

たんの吸引等を実施できる介護職員等の養成の必要性は高まっている。そのため、県と協議し、大学では、感染対策を十分行い全4回の基本研修を開催した。

②活動成果および評価

<活動成果>

基本研修は、講義研修（8時間）と実技研修（2時間）で構成され、全講義終了後に筆記試験を行い、90点以上（100点満点）の合格者に実技研修を行った。今年度テキストが現行の制度や医療機器の進歩に合わせた内容に変更されたことに合わせ、講義内容も一部変更した。また、経管栄養物品が国際規格に合わせて変更され、現場では旧規格と新規格品が混在している状況であるため、どちらの物品でも使用できるように講義、実技ともに内容を追加した。

結果、受講者13名全員が筆記試験に合格し（合格率100%）、シミュレーターを用いて喀痰吸引（鼻・口・気管切開部）と胃ろう注入（液体栄養・半固形栄養）を実施、基本研修を修了できた。

<評価>

今年度受講者は少なかった（令和元年度17名、令和2年度19名）が、次年度から初めて喀痰吸引や胃ろう注入の必要な方を受け入れる予定の施設では、職員が交代で受講し、全員が吸引や胃ろう注入の必要な人々のケアができることを目指していた。受講者の所属施設も、訪問介護ステーションだけでなく、放課後等児童デイサービスなど、地域で暮らす幅広い年代の医療的ケアが必要な人々を支える施設へと広がりを見せていた。今後も本研修のニーズは継続的にあると考えられ、受講者が参加しやすい日程を調整しながら継続する必要がある。

(3) 退院支援体制促進事業

①活動の概要

入退院支援事業は、高知県より委託を受けて実施しており、平成28年度に本学が策定した「地域・多職種協働型の退院支援の仕組み作りガイドライン（以下、ガイドライン）」の普及・啓発を推進するとともに、ガイドラインを活用して病院の入退院支援体制の構築及び、入退院支援・退院調整における院内の横断的な調整役、かつ地域のコーディネーターとなる人材を育成するための研修等を行っている。平成29年度は回復期病床を有する病院とその地域が協働して入退院支援の仕組み作りを行う支援をした。平成30年度からはガイドラインの定着化を継続するとともに、新たに急性期からの入退院支援の推進を目指し、急性期・回復期・在宅へとシームレスに移行する地域・病院・多職種協働型入退院支援体制の構築に取り組んだことと追加し、昨年度はガイドライン Ver.3 に改定し洗練化を行った。今年度は、その波及・定着化に向けた事業展開を行った。相談支援事業では、事業参加病院を決定し、その病院と地域で実施する運営メンバー会議を基盤として、各病院と地域の退院支援の優先課題、地域とともに目指す姿を軸に、病院機能や地域特性を踏まえた退院支援の仕組みを目指し、支援を行った。まず地域と病院が考える「入退院支援における優先課題」を抽出し「共に目指す姿」を決定、次に抽出した優先課題解決に向けた具体策について地域と病院が共に考え、入退院支援の流れを活用したツール「入退院支援可視化シート」に反映した。そのシートに基づき事例展開を繰り返し、洗練化を行う。今年度の事業参加病院は、高知市の回復期（いずみの病院）と、昨年度から継続して安芸福祉保健所管内での急性期（あき総合病院）からの入退院支援のシステム構築を目指した。

研修事業では、ハイフレックス型を取り入れ、【管理者研修】【看護管理者研修】【多職種協働研修（全5回シリーズ）】【入退院支援コーディネート能力修得研修（全3回シリーズ）】及び、【入退院支援コーディネーターフォローアップ研修】を1回（高知市・四万十市の合同開催）実施した。さらに、今年度は、新たな試みとして「入退院支援事業 大交流会」を実施した。また、事業報告会についてはオンデマンドで行った。

②活動成果及び評価

i. 急性期病院からの入退院支援システム構築

今年度は、安芸福祉保健所管内の仕組みづくりの2年目となったが、コロナ禍の影響を受けステップ2の地域との合意形成から再スタートした。ステップ3の事例展開を2年計画で開始した。ガイドライン Ver.3 に沿って、基盤整備、運営メンバーを選定し、運営メンバー会議で「優先課題」「目指す姿」を検討した。会議の開催にあたっては、新型コロナウイルス感染症対策のためにオンラインを活用して実施した。本事業開始が遅れた影響から、次年度は、ステップ2から開始し、「入退院支援可視化シート」の作成とシートを活用した事例展開を繰り返していく予定である。

ii. 回復期病棟からの入退院支援システム構築とモニタリングシートの洗練化

昨年度開始した凶南病院における仕組みづくりはコロナ禍において年度内での事例展開が十分展開できなかったため、継続してシステム構築を支援した。新たなモデル病院であるいずみの病院では、ガイドラインに沿って、基盤整備、運営メンバーを選定し、運営メンバー会議で「優先課題」「目指す姿」を検討し、「入退院支援可視化シート」を作成したが、第6波の影響を受け、事例展開には至らなかった。

また、地域病院多職種協働型入退院システムモニタリングシート（以下、モニタリングシート）の効果的な活用法について記載したマニュアル作成の予定であったが、これも次年度に延期となった。なお、今年度は昨年度の課題であった地域版のモニタリングシートを作成し、意見をもらい洗練化を図った。

iii. 研修事業、報告会

研修会はハイフレックス型を取り入れ、感染予防対策を徹底し研修日を変更しながらもすべて開催することができた。さらに、今年度は、新たな試みとして「入退院支援事業 大交流会」を実施した。報告会は、オンデマンドにて開催し、事業報告会は高知県のみならず全国から視聴希望があり、1か月間の視聴期間において総再生回数は344回であった。

IV. 総合評価

相談支援事業、及び研修事業において、65施設、延べ954人の参加があり、報告会の総再生回は344回であった。今年度も新型コロナウイルス感染状況を鑑み、臨機応変な対応を余儀なくされたが、委託元の高知県と協議し、当初の委託内容を一部変更しながらも事業展開を行うことができた。相談支援事業・研修事業を展開することにより入院時から、地域・病院・多職種で切れ目のない円滑な移行を目指した「地域・病院・多職種協働」による入退院支援の体制づくりの必要性について県全体への周知に繋がっており、入退院支援推進を病院主体で取り組む事例も多くなっていることから、高知県の地域包括ケアシステムの重要な構成要素である「在宅医療」・「介護連携」にも、寄与できたと考える。

(4) 糖尿病保健指導連携体制構築事業

令和元年度より高知県から委託を受け、「糖尿病保健指導連携体制構築事業」を開始した。本事業は、地域の特定健診ハイリスク者、糖尿病重症化ハイリスク者及び治療中断者に対して、多職種との連携・協働体制のもと継続的かつ効果的な保健指導と生活支援を行う「血管病調整看護師」を育成し、その活動を支援するものである。

今年度は、第3期にあたる6つの基幹病院をモデルに、糖尿病療養指導士の資格を持つ看護師等を対象に育成研修会を開催した。第6回では第1-3期モデル基幹病院で合同事例検討会を開催した。報告会では第1-3期モデル病院が活動報告を行った（表1参照）。また、第1期2施設、第2期5施設の活動支援として実践状況と活動に関するフォローアップを目的に、各病院1回コ

ンサルテーションを実施した。(コロナ感染の状況にて3施設は中止)

活動評価としては、育成研修会をWEB開催とすることで、コロナ感染拡大の状況下においても研修を継続することが可能であった。育成研修会では、研修生が検討会の中で他施設の状況と比較しながら自施設のケア調整について検討していった。また、ケア検討を通して様々な背景をもつ患者の理解を深め、支援方法を検討することができた。自施設での血管病調整看護師の現状を踏まえ今後の活動の方向性を検討することができたが定着に向けて継続的な支援が必要と考える。(詳細は健康長寿センター報告書参照)

表1. 令和3年度糖尿病連携体制構築事業「血管病調整看護師」育成研修会

第1回「血管病調整看護師」 育成研修会プログラム	参加者 28名 スタッフ 6名	Web開催/ 高知県立大学 池キャンパス	2021年6月22日 13:00~17:00
第2回「血管病調整看護師」 育成研修会プログラム	参加者 34名 スタッフ 5名	Web開催/ 高知県立大学 池キャンパス	2021年7月29日 13:00~17:00
第3回「血管病調整看護師」 育成研修会プログラム	参加者 27名 スタッフ 5名	Web開催/ 高知県立大学 池キャンパス	2021年8月27日 13:00~15:00
第4回「血管病調整看護師」 育成研修会プログラム	参加者 37名 スタッフ 6名	Web開催/ 高知県立大学 池キャンパス	2021年9月16日 13:00~17:00
第5回「血管病調整看護師」 育成研修会プログラム事例検討会 (各病院で開催)	①参加者 6名 スタッフ 4名 ②参加者 2名 スタッフ 6名 ③参加者 3名 スタッフ 6名 ④参加者 4名 スタッフ 3名 ⑤参加者 4名 スタッフ 6名 ⑥参加者 7名 スタッフ 4名	①②④ 各施設を訪問 ③⑤⑥ Web開催/ 高知県立大学 池キャンパス	①近森病院 2022年1月7日 ②高知大学医学部附属 病院 2022年1月11 日 ③幡多けんみん病院 2022年1月17日 ④高知医療センター 2022年1月18日 ⑤高知赤十字病院 2022年1月25日 ⑥三愛病院 2022年3月17日
第6回「血管病調整看護師」育成 研修会プログラム 合同事例検討会	参加者 26名 スタッフ 6名	Web開催/ 高知県立大学 池キャンパス	2022年2月8日 13:00~17:00
第1・2期フォローアップ「令和3年 度の実践状況と課題の検討」	①参加者 4名 スタッフ 4名 ②参加者 3名 スタッフ 4名 ③参加者 3名 スタッフ 3名 ④参加者 4名 スタッフ 5名	Web開催/ 高知県立大学 池キャンパス	①高知県立あき総合病院 2022年2月16日 ②佐川町立高北国民健 康保険病院 2022年2月21日 ③高知記念病院 2022年3月8日 ④JA 高知病院 2022年3月10日
令和3年度高知県糖尿病保健指導 連携体制構築事業報告会	未定	期間限定オン デマンド配信	2022年 3月28日~4月21日

4) 高知県内の医療・健康・福祉専門職者のスキルアップに資する活動

(1) 高知県新任期保健師研修会

今年度も、高知県内保健師 1 年目から 4 年目までの保健師を対象とした人材育成について OJT による目標立案と、集合研修の企画・実施に取り組んだ。1 年目の保健師を対象とした研修では「個別支援」、2 年目の保健師を対象とした研修では「地区診断」、3 年目の保健師を対象とした研修では「PDCA サイクル①」を、4 年目の保健師を対象とした研修では「PDCA サイクル②」をテーマにして実施。平成 31 年 3 月に改訂した保健師人材育成マニュアル Ver3 に基づき、新任期保健師に必要な能力を高めるために、集合研修によるグループワークを中心に実施した。今年もコロナ禍による感染症対策の業務により、参加の難しい保健師がいたため、次年度の参加などを促すようにしていく。

前期と後期の研修の間には、福祉保健所ごとに行われる、それぞれの時期に求められる能力を獲得していくためのフォロー研修に、講師として参画し、個別にコンサルテーションを行い、課題達成に向けた助言を行う。9～10 月の期間に行う福祉保健所ごとの研修だが、本年は新型コロナウイルス感染症の感染拡大時期と重なった。そのため可能な限り日程変更し、講師としての参画を調整したが、日程調整が十分にできない状況があった。

今後も、各福祉保健所の地域支援室の担当者や高知県とともに、次年度は人材育成ガイドラインの評価見直しの検討会をとおして、研修内容の洗練化に取り組んでいく。

(2) 新任期保健師採血技術向上研修

① 活動の概要

本事業は、高知県内福祉保健所に勤務する保健師の採血技術の向上を通して、県民の保健・医療・福祉サービスの質向上に寄与することである。今回の研修では、採血業務を担当する福祉保健所保健師が、安全で確実に採血を行うために必要な知識と技術を身につけることができることを目標に、企画・実施した。今年は、前年度が感染症蔓延のため実施できなかったため、県からの要望も強く、年度初めの実施となった。

② 活動成果および評価

【開催日時】令和 3 年 4 月 21 日 13 時 30 分～16 時

研修は、事前の知識の確認、講義、採血モデル使用しての演習、受講者間の相互演習、事後の知識確認で構成され、合計 2 時間半の中でも効果的に学ぶプログラム設計であった。その成果とし、研修終了後のアンケートの満足度も高く（“今日の研修の内容は満足のいくものだった” に 9 人中 8 人は「とてもそう思う」と回答）、研修内容への評価も高かった（“インストラクターは学びにつながる関わりをしてくれた” との項目には全員が「とてもそう思う」と回答）。

(3) 公開講座

① 「フィジカルアセスメント研修」

本講座は、健康長寿センターの「高知県内の医療・健康・福祉専門職者のスキルアップに資する活動」の一環として実施した。今回の公開講座では、県内の卒後 5 年目まであるいはフィジカルアセスメントに自信がない看護師の方々を対象に、具体的な事例を症状アセスメントパスウェイに基づいてアセスメントを考え、実践する形式のフィジカルアセスメント研修を開催した。今年度は、コロナ禍のため集合での研修は難しく、Web 会議ツール ZOOM を用いて遠隔で行った。

研修は、症状アセスメントに必要な知識と技術の枠組みである、ABCDE アプローチ、バイタルサインの変化の重要性、問診・視診・触診・打診・聴診といったフィジカルアセスメントについて、解剖生理の知識と手技とがつながる内容にした。また、高齢者の誤嚥性肺炎および手術後肺梗塞の事例を通して理解する内容にした。ZOOM の機能を使いグループワークを随所で取り入れ、手技の演習や遠隔シミュレーションでは、GoPro カメラと高性能集音マイクを用いて、遠隔

であっても集合研修と同様のライブ感を感じられる映像とした。

参加者は、8名で地域包括ケア病棟、介護病棟、外来というように、要介護高齢者に関わることが多い場で勤務されている方々であった。「他の受講者の方の意見や、講師達の分かりやすい説明で、呼吸や心臓への観察やアプローチを学ぶことが出来ました。」「具体的に病棟にいるような患者さんの事例で、すぐに役立つそうだと思います。」「実践に役立てたいと思います。」等、多くのご意見を頂くことができ、臨床現場ですぐに使えるスキルの獲得に繋がる機会になった。

② 「地域減災拠点事業」BCP策定研修

本事業は、健康長寿センターの活動内容における「高知県民の医療・健康・福祉政策課題を解決する活動」及び本学の地域減災拠点事業の一環として実施した。また、高知県内の医療・介護施設、訪問看護ステーションの管理職、当該施設で勤務する看護職にとって、喫緊の課題であるBCP（業務継続に向けた計画）策定に向けて、その原点となる情報を提供することを目的として活動を実施した。

<活動成果および評価>

【開催日時】令和4年2月23日 15時30分～17時30分 遠隔会議システム

講演は、「あれからもうすぐ10年、自然災害発生時の業務はどう継続する？～東日本大震災の体験から～」というテーマで、当時の画像を通して具体的な体験が語られた。

講演後の質疑応答やアンケート結果からも今回の研修の主目的である「何のためのBCP策定なのか」という視点に立ち返るきっかけとなったと思われる。東日本大震災から10年が経過したからこそ、語る内容を通して、受講者の一人ひとりが、自分ゴトとして捉え、それぞれの現場に求められるBCP策定につなげていく基盤となった。

また、今回の研修会を企画した主要メンバーは、平成30年度戦略的研究推進プロジェクト（テーマ3：災害に関する課題への取り組み）「須崎市医療救護病院におけるBCP策定支援を基盤とした災害対策研修プログラム開発」に関わったメンバーから高幡地区に広がったメンバーであり、今後は、県内の事業所や施設で実際にBCP策定に関わる人々を対象にシリーズ化したプログラムを実施予定である。

5) 高知県の健康長寿を研究する活動

(1) 地域ケア会議コンサルテーション事業

① 活動の概要

土佐市連携事業である、地域ケア会議推進プロジェクトで開発した「地域ケア会議運営ガイドライン」及び「地域ケア会議評価指標」の一部を用いて、高知県内各市町村で開催している地域ケア会議の質改善及びスタッフのスキルアップを目的に、依頼のあった市町村の地域ケア会議に参加した。市町村のニーズに合わせ、アドバイザー及び地域ケア会議の評価者として関わり、運営等の助言や研修等を行った。

また、昨年度高知県地域福祉部高齢者福祉課が地域ケア個別会議で抽出した地域課題から、政策形成に繋げることができるよう「高知県版地域ケア会議ガイドライン Ver.2」を作成したことを受け、講義を担当し、本ガイドラインの普及を行った。

② 活動成果及び評価

各市町村の地域ケア会議については、開催開始時期も異なり、特に高知市においては直営の高齢者支援センターの開催ではなく、それぞれが抱えている課題が異なる。そのため、課題をともに共有し、解決に向けてどう取り組んでいくのか話し合いをもとに実施、評価していく必要がある。今後も、市町村の地域ケア会議の発展過程をみすえ、関わっていく必要がある。

特に今年度は、上述の「高知県版地域ケア会議ガイドライン Ver.2」に基づく講義を担当し、研修時の情報交換において、いくつかの課題が明確になった。特に、地域課題から政策形成に繋げ

ることの課題や会議の持ち方について困難を抱えていることが明らかになった。今後も、高齢者福祉課と協働しながら、支援を継続していく必要がある。

(2) 健康長寿研究のためのロジスティクス

① 健康長寿センター健康長寿研究のためのロジスティクスの概要

健康長寿センターでは、健康測定機器を用いた県民への健康啓発活動や、教育研究活動に利用していただくために機器の貸出を行っている。教育研究活動のために、看護学部および健康栄養学部以下に以下の機器の貸出を行った。

② 貸出 1

目 的：看護研究（卒業研究）での安楽度の測定

貸出機器：ブレインプロ 1 台

研究者名：看護学部 教授 池田光徳ほか

研究内容：種々の枕による後頭部の除圧効果

期 間：2021 年 6 月 1 日～2021 年 8 月 31 日

研究成果：高知県立大学看護研究発表会（2022 年 3 月 3 日）において発表された。

③ 貸出 2

目 的：健康栄養学部ゼミ研究

貸出機器：手動身長計付き体組成計 1 台、簡易血中乳酸測定器 2 台、らくらくウェルネス（血管年齢、脳年齢測定計）1 台、ストレス測定器 1 台、唾液アミラーゼモニター 5 台、握力測定器 2 台、ブレインプロ 1 台、物忘れ防止プログラム 1 台

研究者名：健康栄養学部 名誉教授 稲井玲子ほか

研究内容：栄養教育および栄養指導の媒体におけるエビデンスに関する研究

期 間：2021 年 4 月 1 日～2022 年 3 月 31 日

研究成果：キクイモ由来のイヌリン摂取に関する研究

ナタマメ摂取による生体に及ぼす効果

上記 2 題について高知県立大学健康栄養学部卒業研究発表会（2021 年 12 月 24 日）において発表された。

④ 今後の課題

健康長寿センターは、健康長寿体験型セミナーやとさっ子健診などのためにいくつかの健康測定機器を常備している。以前からそれらを本学での健康長寿研究のために活用したいと考えていた。本年度も新型コロナ流行のために対面的な事業が実施不可能になり、これらの機器の使用ができなかった。それにかわって、学部生の研究を推進するためにいくつかの機器を貸し出した。健康栄養学部には昨年と同様に貸し出したが、本年度は看護学部にも貸し出し、研究教育手段として健康長寿センターの配備機器を有効に使うことができた。今後も健康長寿センターは、研究推進のためのロジスティクスとしての機能も果たしたいと考えている。

⑤ 参考

参考に健康長寿センターが管理している健康測定機器を表 2 にあげる。

表2 健康長寿センター配備機器

	機器名称	メーカー	台数	消耗品等
1	らくらくウェルネス (血管年齢・脳年齢測定)	ウェルアップ	1	
2	結果印刷用プリンター	エプソン (型番 : EP879AW)	1	プリント用紙 (A4) トナー
3	ストレス測定器	ウェルアップ	1	
3	唾液アミラーゼモニター	ニプロ	5	唾液アミラーゼチップ (20本入り : 4000円程度)
4	握力測定器	トーエイライト	2	
5	ブレインプロ (PC含む)	FUTEK	1	
6	手動身長計付き体組成計	タニタ	1	昇降補助手すり・スタンドとセットで使用
7	簡易血中乳酸測定器	アークレイ	2	乳酸キットが必要
8	物忘れ防止プログラム		1	